
東京A G I T Ω学園剣風帖

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京AGITΩ学園剣風帖

【Nコード】

N6509J

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

仮面ライダーアギトと東京魔人学園剣風帖のクロスオーバー。アギトに変身するオリキャラと本編主人公のW主人公の予定です。それでも良い方はどうぞ♪

第零話《過去語》

S I D E ? ? ?

小さい頃からオレには人には無い不思議な力が有った。

超能力とでも言えば良いのだろうか？

スプーンを曲げたり、ビンの中に百円玉を入れられたり、テニスボールの表と裏を入れ替えたりとか出来た。

最初は普通なのだと思っていたけど…両親はオレの力の事を気味悪がって、距離を置かれるようになった。

成長するに連れて力は強くなって行くけど、力の使い方を理解してきて制御できる様にもなってきたけど、それでも、両親からの扱いは良くない…寧ろ、悪くなって行ったとも言える。

人間って奴は自分達と違う物を排除したがる…それが強ければ手が出せないから怯えて避けるようになり、弱ければ力で排除しようとする。

オレが何度自分の力から守っていたのか…それも知らないで…。

虐待とかされた時は両親を殺さなかった事を誉めて上げたいくらいだ。

…この力をそんな事に使っちゃいけない気がしたから、自分の身を守る為に力を使いそうになった時、必死に耐えた。

それから数ヶ月後…力が完全に消えた変わり、新しい力を手に入れた。…それと同時にこの力の事を全て理解した。

この力の事を…これが…力の完成形だと言う事に…。

そして、両親だった奴らは超能力が消えた事でオレの事を捨てた。
…でも、最後に力を使って脅かした時は少しだけ気分がすっきりしたな。
…脅かすくらいならいいよね…散々酷い目にあわされたし、傷付けてないしね。

それから数日後ある人に拾われた。オレの力の事を知っても怯えずに救ってくれた。

その人に出会わなきゃ、オレはどうなっていたかは分からないけど、生きているにしろ、死んでいるにしろ、最悪である事には変わらないなかっただろう。

自分の知っている力の事を話した時、その人は一つだけオレに頼んだ。
…オレに力と覚悟があるのなら、守って欲しい者が…力を貸してあげて欲しい相手がいる。と

知らなかった世界の陰の事を聞き、その人物が恩人の親友の忘れ形見だと聞いて、喜んでオレはそれを引き受けた。

そして、オレに戦い方…まあ、基本的な事と、力の使い方を実際に使って見て学び、その人に力になるように頼まれた相手と同じ学校に、同じ時期に転校する事になったのだ。

力無き人を傷付けてはならない。それが、オレの力に課せられた規律。^ル

その規律を破った時、絶対的に抗えない裁きが下る事を理解した。
そんな気は無いけどね。

でも、力無い人達を…まだ居ないけど大切な人を守る為に使わせて

もらう…このAGITΩの力を。

第零話・了

第巻話《転校生》

1998年、春——真神学園3—C教室

「ねえねえ、知ってる？ 今日ウチのクラスに転校生が二人も来るんだって。」

「聞いた聞いた。職員室で、教頭がマリア先生と話してたんでしょ！？」

チャイムが鳴る前の教室は騒がしい。それはいつも通りの光景なのだろうが、今日は一段と五月蠅かった。…それは当然だろう、学生という立場の者にとっては大きなイベントである転校生がやってくるというのだから。…しかも、二人も。

チャイムが鳴ると同時に教室のドアが開き、このクラスの担任である『マリア』アルカード』と二人の男子生徒が入って来た。

「あっ、噂をすれば…。」

「きりーっ、きょーつけー、礼！」

女生徒の一人がお決まりの挨拶を終えると、アリアは改めて挨拶を交わす。

「Good Morning Everybody.」

「Good Morning Miss. Maria.」

「おはよう。みんな揃っているかしら。もう知っているヒトもいると思うけど：HRに入る前に、今日から皆さんと一緒に、学んでいくことになる転校生を紹介します。」

「『緋勇 龍麻』といいます。これから一年よろしくお願いします。」

「『澤田 翔一』です、どうぞよろしく。」

「緋勇くんッ、澤田くん。血液型は、なに？」

「あッ、ちよつとオ、アタシも聞こうと思ってたのにィ。ぜったい、B型よね。あたしと相性バッチリッ」

「あんた、この間も、王蘭高校の如月くんに、おんなじような事いつて迫ってたでしょう」

「さあねェ」

「あたしも、しつもんッ！」

「あたしもあたしもッ！！」

「好きな食べ物はア？」

「好きな女の子のタイプはッ？」

「お姉さんか妹いるッ？」

「スポーツなにやってんのオ？」

本人達に聞いているのか聞いていないのか分からない雰囲気で異様に盛り上がるクラスの雰囲気、龍麻は困った様子で律儀に答えている。

それに対して翔一は適当にはぐらかして受け流していた。

(…苦手なんだよな…こう言うのってさ。)

そんな事を考えながら。心の奥では冷たい表情を浮かべていた。

「はい、みんな。質問はここまでよ。二人が困ってるでしょう。ごめんなさいね、みんな、転校生が珍しくてしょうがないの。さっ、みんな、授業に入りますよ。緋勇くん、澤田くん、君達の席は…。」

マリアは教室を見渡し、二つの場所に視線が止まる。

「美里さんの隣と桜井さんの隣の席が空いていたわね。澤田くんは桜井さんの隣に、緋勇くんは美里さんの隣に。美里さんは、クラス委員長だから、イロイロ聞くといいわ。」

「はい。」

「はい。」

外用の表情を張り付けながら翔一は桜井と呼ばれた女生徒の隣の席に着いた。

「よろしくね、澤田くん!」

元気良く手を差し伸べる彼女に、翔一はにこやかに手を握り返した。

「うん、よろしく。あと、オレの事は苗字じゃなくて、名前で呼んでもらえる。」（…まあ、精々楽しもうか…トモダチゴッコを…。）

自分の力の所為で実の両親にも排除された過去を持つ翔一にとっては他人と必要以上に関わるのが好きではないのだ。何れ拒絶する物、される物、その程度の認識でしかない。

（…苦手なタイプだな…。）

表向きの仮面を被りながら隣の席の女生徒―『桜井 小蒔』というらしい―に話しかけられながら、適当に言葉を返しながら内心ではそんな事を考えていた。

（…大切な人…ね。良く考えたけど…出来る訳ないよな…どうせオレは…人間じゃないんだからな。）

自分の力を見て拒絶しなかったのはここに行くように頼んだ恩人くらいなものだ。異形の姿…前は安定して金色の《アギト》と言うらしいまだ化け物なりに見れる姿になっていたのだが、最近では時々本物の碧色の正真正銘の化け物にもなってしまう事も多々有る。

…それは過去に受けた大きな心の傷が原因で受けた一種の人間不信に当たるのだろう。そして、彼の言う碧色の化け物は彼は知らない事だが、不完全なアギト《ギルス》と言うのだ。

（…まあ、あの人に助けられた事は事実なんだし…思惑がどうで有れ、恩返しは全力でさせてもらおうか。）

自分と同じ時期に転校してきた生徒…隣の席の生徒小蒔の友達らしい、『美里 葵』と話している龍麻を横目で見る。

（はあ…トラブルでも引き寄せる体質でも持つてるのか…？ 性質の悪そうなのに目を付けられてるしな…。…あの人から教えを受けたいから、それなりに使えるとは思うから、当て馬には丁度良いだろう。…危なければ助ければ良い事だしな。）

「よう、転校生。」

細長く、袋に入った何か一竹刀にも見えるが、形状から考えて、恐らくは木刀だろう一を持った背の高さや体格も翔一とそれほど変わらないであろう少年が話しかけてくる。

「俺は蓬萊寺京一^{ほうらいじ きょういち}。こんな時期に編入だなんて、珍しい奴だな。まあ、縁あって同じクラスになったんだ、仲良くしようぜ。」

「うん、こちらこそよろしく。」

「ところで、剣術でもやってるの？」

「ああ、これでも剣道部の主将をやってたんだ。」

そう言った後、京一は思い出した様に口を開く。

「そうそう、お前にも一つ忠告しておくが……あんまり目立った真似はしない方が身の為だぜ。特にこのクラスには……。」

そこまで言って後に視線を向けると、その先にはいかにも『不良です』と言う外見の生徒が四人屯していた。

「頭に血が上り易い奴らが多いしな。」

思わず笑いが浮かんでしまう。『真正正銘の化け物』である自分が今更不良程度相手に何を怖がる必要が有ると言うのだろうか？ 精々、間違って力を使ってルールを破ってしまわないか気を付ける程度だ。

「善処するよ。向こうの方次第だけどね。……まあ、彼のが飛び火するのに関しては、オレじゃどうしようもないけど。」

そう言って不良達の視線の先に居る龍麻を身ながら苦笑を浮かべる。

「肝据わってんなお前。学園の聖女を崇拜してる奴はいくらでもいるんだ。んじゃな！」

「じゃーね。」

そう言って立ち去って行く京一にヒラヒラと手を振りながら翔一は見送った。

（さて、どう対処するかな？）

『向こうから喧嘩を売ってきたら二度と喧嘩する気が起きないほど叩きのめそう。』と言う極平和的な解決策を思いつきながら、翔一は机に突っ伏すのだった。

キンコーンカーンコーン

放課後を告げるチャイムが鳴る。

（あー…やっと終わった…。）

過去の経験から他人と関わる事が苦手と言うよりも苦痛に感じる事の多い翔一に取って学校と言う空間…しかも、注目を集めやすい転校生と言う立場は苦痛でしかない。

サッサと帰りたい所だが、事情を聞き、力になるように頼まれた相

手である緋勇龍麻の様子もある程度見ておく必要も有り、そう言う訳にも行かないのだ。

それでも、授業は真面目に受けているのは成績さえ良ければ、教師は静かなのだから授業自体は真面目に受けている訳である。

「転校生…ちよつとツラ貸せや。」

帰ろうとした時、不良と言った外見の男子生徒がそう話しかけてきた。

（…相手は二人…雑魚か。）「顔は外せないから貸せないけど？」

もう一人の不良も翔一を威圧する様に立っていた。

「ちよつと付き合えって言ってるんだよ！」

「…うわ！　そう言う趣味！？　…悪いけど、オレにはそう言う趣味はないんだけど。…みなさーん、こいつ変態ですよ！！！！　時代遅れなコスプレみたいな不良スタイルの上に変態ですよ！！！！」

「誰も、んなこと言ってるねえだろうが！！！！」

怒りで顔を真っ赤にしながら叫ぶ不良二人で有った。…この二人の不良…今まででもその素行から他の生徒から距離を置かれていたが…その日から別の意味でも距離を置かれる事となるのだった。

「……しょうがねえな、おめえらは……。」

別の威圧的な声が響く。…不良達を中心に居た“不細工な”男子生

徒がそこには居た。(b y. 翔一)

なお、この不良は『佐久間』と言った。

「澤田とか言ったな…テメエもちよつと、そこまでツラ貸しな。」

(…やれやれ…彼のが飛び火したって事か…) 「別に良いよ。オ
ーソドックスに体育館裏って所だね。だから、その不細工な顔近付
けないで貰えるかな。」

ふと、不良と一緒に居る龍麻を見て翔一は龍麻の事が飛び火したと
考える。京一と話していた時に言った事が現実の事となったのであ
る。

そして、『澤田』と言う姓は自分にとって最も嫌う…本来の姓であ
る。自分に恐怖して捨てた両親との繋がりを思い起こさせるのだ。
それを呼ばれたから余計に不機嫌になる。

(…丁度良いか…。こいつ等を叩きのめしておけば色々と煩わしい
事に関わらなくてすむ。)

他人は危険と思えば自分達も巻き込まれなように向こうから勝手に
距離を置いてくれる。あとは、二度と喧嘩がしたくなるほどに
叩きのめせば、連中も近づかなくなる。そう考えて翔一は冷たく笑
みを浮かべた。

「お前ら…もう少しオレから離れて歩け。」

先ほど翔一を呼び出していた不良二人に対して明らかに距離を取る
佐久間だった。他の取り巻きの不良から同様の態度を取り始める。

「緋勇：澤田：お前えらにこの学校のルールって奴を教えてやるよ。」

「オメエらもツイてねえなあ。」

「転校早々佐久間さんに目エつけられちまうんだからよ。」

佐久間がそう言うを取り巻きの不良達が龍麻と翔一を嘲笑う。ルールなどと言って居るが、何と言う事も無い、ここで龍麻と翔一を集団で私刑に遭わせようとしているだけだ。ご丁寧に見張りまで居る。

「百歩譲って僕に用が有るとしても、彼にはないはずだ。」

「ハッ！ そいつはついでだ。お前と一緒に転校してきた事を恨むんだな。」

（：やれやれ：こんな連中にまで使っちゃいけないのか：？ まったく：“あいつ等”もこんなので守るなんて：少しは人を選んで欲しいな。）「はあ：クズが：。」

思わずそんな呟きがこぼれてしまう。

「テメエ：状況分かってんのか？」

そんな翔一の呟きが聞こえたのだろう、額に血管を浮かび上がらせ、切れる寸前と言った様子だ。

「だからさ…その見るに耐えない醜悪な顔見せるな。ついでに口も開くな、百歩…千歩譲って同じ空気を吸う事を許してやってるんだからな…オレは。」

翔一の口調が変わる。既に理性で抑えられる不機嫌の大半が振り切れてしまっていたのだ。それでも、正当防衛を成り立たせる為に向こうから手を出させる為の“本音”を混ぜた挑発も忘れていない程度の理性は保っている。

「テメエ！　ぶっ殺してやる！」

「強い言葉を吐くなよ…弱く見えるぞ。」

臨戦体勢を取る翔一、そんな時、別の声が響く。

「おいおい、転校生をからかうにしては度が過ぎてんじゃないのか？」

「この声は、蓬萊寺ッ！」

「蓬萊寺君！？」

真上からの声、キョロキョロと回りを見まわしている不良達に対して、翔一と龍麻の二人はその視線は一箇所固まっていた。

その視線の先には木の枝の上で器用に寝転がっている京一の姿があった。

「覗き見とは趣味が悪いな。」

「まあ、そう言うなって。お前らの危機を察して来てやったんだからよ。よっと。」

「うん、ありがとう。」

「ところで澤「翔一って呼んでくれ。」翔一、そっちが素か？」

「まあな。」

「…テメエ、転校生側につくのかよ。」

佐久間が忌々しげに口を開く。

「弱い者いじめは放って置けない性質でね。」

「チッ…まあいい。オレは前からテメエのそのスカした面が気に入らなかったんだよ！」

「ほう、そりゃあ奇遇だな。オレもお前のその潰れたカエルみたいな面が気に入らなかったんだ。」

「まあ、それだけ不細工だったら、どれだけ気に入らない顔が多いんだろうね。少なくとも同年代の人間の九割かな？」

「ふ、二人共…その辺にして置いて上げた方が…。」

怒り…既に殺意に近いそれを龍麻を無視して京一と翔一の二人へとぶつける。当の二人は笑いながらそれを受け流していた。

「……………テメエ等ア……………ブツ殺す！」

「おい、緋勇、翔一、オレの側から離れるなよ！」

「心配ないよ。」

「そう言うことだ。」

「へへ、上等だ。行くぜえっ！！」

その言葉を合図にする様に不良達は一斉に動き出した。

喧嘩は一方的な展開で進んでいた。：数の少ない翔一達が優勢な展開で…。

罵声を上げて殴り掛かる不良の拳を難なく交わし、軽く木刀で脳天を叩いた事で、痛みで悶絶する。無理も無いだろう：剣道部主将の面を竹刀ではなく木刀で受けたのだから。

龍麻もまた流れる様な動きで不良達の振る角材を交わし、上段廻し蹴りで吹き飛ばす。その業は龍が昇る様を形容させた美しい上段蹴り、龍麻の使う『徒手空拳《陽》』の業の一つ『龍星脚』。

（へー、中々…。やるな…。）

適当に不良達をあしらいつつながら翔一は二人の様子を眺めていた。ナイフを持った不良を相手に自分からは反撃一つして居らず、精々が時々足を掛けて転ばす程度だ。

どれだけ数が居ても所詮は武道の経験の無い素人：何人居た所で武道の経験の有る龍麻や京一達の相手ではないだろう。

（まっ、所詮は素人相手じゃ、この程度だな：。当て馬にもならない。）

そんな事を考えながら、足払いを掛けて地面にだいぶした不良の後頭部を踏みつけて、地面とキスさせる。

（：面倒な事だな：。まあ、これだけ弱いなら、ルールを心配しなくていいのは有りがたいが：。そんなに心配しなくても、こんな奴等にあぐトの力は使わないぜ。）

二人目の不良の手から凶器を弾いてから同じ様な手順で気絶させながら、自分を監視している《気配》へと心の中でそう告げる。

「オラァ！！！！」

そんな事を考えていた翔一に向かって佐久間が突進してくる。一番動きが少ない翔一を大した事が無いと思ったのか、別の所へと注意を向けていた彼が隙だらけに見えたのか、彼を狙ってしかけてきた。

「澤田君、危ない！」

龍麻の叫び声に僅かながら翔一の不機嫌さが増す。心配して叫んだのだろうが、自分を捨てた親を連想させてくれる姓で呼ばれるのは心底嫌いなのだ。

「オラァァァァァァァ！！！！！」

佐久間はフック、ストリート、アッパーと攻撃を仕掛けるが悉く回避される。だが、佐久間の顔に笑みが浮かぶ。

(拙い！)

そんな翔一を見て京一は心の中で叫ぶ。何時の間にか壁際まで追い込まれていたのだ。

「澤田君、危ないよ、そっちはダメだ！」

龍麻が警告する。

「へっ！」

腰を落すと若干のタメを作る。佐久間の奥の手であるタツクル。レスリング部に所属し、経験の有る佐久間のそれは今までの不良のそれとは比べものにはならない。

「オレを……姓で呼ぶな。」

心底不機嫌な翔一である。：いや、翔一の八つ当たりで酷い目に遭うのは佐久間なので対して同情はしないが。

「澤田、そいつはやべえ、避ける！」

「澤田君、危ないから逃げて！」

「死ねえええええ！！！」

「オレを…姓で……呼ぶな！！！」

怒りに満ちた叫び声を上げて突っ込んできた佐久間に足払いを掛ける。

ガン！！！！

衝撃音と共に佐久間は顔面から体育館の壁に突っ込んでいた。

「さ…佐久間…」

「あ…あれは…」

ゆっくりと赤い（鼻血の）線を引きながら佐久間が崩れ落ちた。

「グエグエグエグエ！！！」

「……………」

無言のまま冷酷に後頭部からスタンプングを繰り返す翔一の姿があった。

「お、おい、その辺にしといてやれよ…」

「幾らなんでもそれはやりすぎだよ。」

「そこまでだ！」

その場に新たな登場人物の声が響く。180を越えていそうな身長と、それに見合う以上の筋肉が制服の上からでも分かる大男だ。そして、あとは二人：

「美里さん……。」

「桜井さん。」

「醍醐！」

京一の言葉から男子生徒が醍醐と呼ばれているのだと言う事が分かる。

「まったく：オレが学校にいない時に、問題を起してくれるな、京一。」

醍醐と呼ばれた生徒は溜息交じりにそう言った。その態度から二人が親交が深いのだと言う事が分かる。

佐久間の頭部を地面に固定しながら二人の様子をそう観察していた。

「ふん。そういや、今日は姿が見えなかったな。」

「トレーニングジムに籠りつきりだったのさ。それと、緋勇と澤翔一だ。名前で呼んでくれ。」：翔一、レスリング部の部員が言い掛かりをつけたように謝る。だから、その辺にしておいてやってくれ。」

そう言って醍醐と呼ばれた生徒が「すまん。」と謝ると、翔一は佐久間を固定していた足を離す。置き上がらない所を見ると完全に気絶しているのだろう。

「しかし、よくここが分かったな、醍醐。」

「ああ、美里と桜井が真っ先に知らせてくれたんだ。あの慌て方は、神嬢じゃなかったな。緋勇君と翔一君が危ない、ってな。」

「「だ、醍醐君！」」

葵と小蒔は顔を真っ赤にさせて声を揃えてそう叫ぶ。そんな彼女達に対して彼、『醍醐 雄也』は豪快に笑う事で、自分の言葉をうやむやに指せた。

「まあ、要らぬ心配だったみたいだな。」

「そうだね。京一君も龍麻君も何か武道をやっていたようだしね。」
そんな醍醐に対して素早く仮面で素を隠しながら翔一が答えた。内心、京一と龍麻は彼の変わり身の早さに感心してしまっていた。

「桜井さんも、ありがとう。」

「うん。どういたしまして。」

「じゃあ、用が有るから、この辺でじゃあね。」

そう言って翔一は自分を監視している気配の元へと向かうべくその場を後にする。

「あいつ…ただもんじゃねえな。」

「そうだね、避けていただけど…あの動きは只者じゃないね。」

「しかし…謎の転校生はお前だけじゃないんだな。」

「そうだね。…『澤田 翔一』くんか…。」

彼の事は本当に謎が多い。二人してそう思ってしまう。だが一つだけわかる事は…

「「あいつ（彼）の事は苗字で呼ばない様に気をつけよう。」」

それであった。

二つの宿命を招き入れた場所…真神学園…別名・魔人学園…

……AGITΩと黄龍……

二つの強大なる宿星がこの地で交差した。

別の場所

翔一は腰に手を当てて、力を貯める様に念じると腰にベルト『オルタリング』が出現する。

「変身!!!!」

光に包まれ、翔一はその姿を『仮面ライダーアギト』へとその姿を変えて跳躍し、そこへ辿り着くと目の前に要る怪人へと視線を向ける。

「お前か…オレを監視していたのは…。何の用だ？　まあ、仲良くしようって言う…。」

殺気を向けるアギトに対して怪人…アギトの世界と呼ばれる世界において最強クラスのロード怪人…アンノウンである『水のエル』はまあ待てと言う様な態度で、殺気立つアギトを征する。

「……様子だったのか。…オレに話が有る…?」

アギトの言葉に同意するように水のエルは頷くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6509j/>

東京AGITΩ学園剣風帖

2010年10月9日23時23分発行